

体育祭、男子の総代は 女子の副総代にチンポ を見せなきゃいけない伝 統の儀式があった

とある県の北部にある伝統ある進学校の話。毎年10月中旬に行われる体育祭は、地域でも有名な一大イベントである。単なる運動会ではなく、クラス横断の縦割りチーム対抗戦という独自の形式が特徴だった。3年1組、2年1組、1年1組が「1組チーム」として合同で活動し、2組、3組、4組も同様にチームを組む。各チームは綱引き、騎馬戦、男女混合リレー、障害物競走、応

援合戦など多様な種目で得点を競い、総合優勝を目指す。

生徒たちの熱気は尋常ではなかった。9月も下旬に入り、体育祭までの準備期間が本格化していた。みんな放課後は教室に残り、体育祭に向けた準備に勤しむ。雄也は3年1組の男子で、サッカー部に所属していた。成績はクラストップ、責任感が強く、クラス委員も務めていたため、自然と1組チームの総代に推される形となった。副総代に選ばれたのは、同じクラスの凜華だった。大きな瞳と柔らかな笑顔が印象的なかわいい少女。成績は雄也と同じく学年トップクラス、バレーボール部では県大会出場経験もあり、容姿と能力の両方を兼ね備えた才女として知られていた。

2人は3年の新クラスになってから、雄也が隣の席になった凜華に教科書を貸したのがきっかけで仲良くなった。以降、休み時間に勉強の相談をされたり、部活帰りに校門で偶然会って一緒に帰る機会が増えたりした。凜華は物静かだが、話すと意外と明るく、雄也の冗談に笑う姿が可愛らしかった。雄也は密かに彼女を好きになっていたが、告白する勇気はまだなかった。ただ、毎日彼女の姿を見るだけで胸が温かくなる、そんな関係だった。

体育祭準備が始まってから、2人のやり取りはさらに増えた。ある日の放課後、体育館裏の準備室で。「雄也くん、これ見て。騎馬戦の作戦なんだけど、1年生の男子をどう配置するかで意見が分かれてて……」凜華がノートを広

げて相談してきた。彼女の指がページを指差すたび、雄也は少しどきりとした。近くで嗅ぐ凜華の髪の毛の香りが、ほのかに甘い。「そうだな。1年生は身長が低い子が多いから、後ろの馬部分に固めて安定重視でどうかな。俺が前をやるよ」「雄也くんが？ でも最後のリレーのアンカーもするでしょ？ 体力的に大丈夫？」2人はノートを囲んで30分以上話し込んだ。凜華は真剣にメモを取り、時折「雄也くんの言う通りかも」と微笑む。雄也はそんな彼女の横顔を盗み見ながら、胸が高鳴るのを抑えきれなかった。凜華の真剣な眼差しや、時折見せる柔らかい笑顔が、雄也の心を優しく掴んで離さなかった。

しかし、体育祭が近づくにつれ、雄也の心に影が落ち始めた。先輩から「総

代の儀式」についてぼんやりと聞かされたのは、9月中旬のことだった。「体育祭前日に副総代の女子にお前のおちんちんを見せるんだよ。伝統だからな」と笑いながら言われ、雄也は冗談かと思った。だが、複数の先輩から同じ話を聞き、凜華にも同様の連絡が行っていることを知り、青ざめた。(凜華に……俺のちんこを見せる？ そんな馬鹿な……)雄也は夜、布団の中で何度も考えた。自分の性器は、昔からずっとコンプレックスだった。他の男子と比べて明らかに小さく、皮が厚く被さったままほとんど剥けない。あの凜華に、そんな部分を晒すなんて想像しただけで吐き気がした。それでも、総代を辞退すれば1組チーム全体に迷惑がかかる。凜華にも負担をかける。

雄也は毎晩のように儀式のことを想像しては眠れなくなる日が増えた。学校に来て集中できず、練習中にミスをする回数が増え、凜華に心配される場面もあった。

10月に入り、準備は最終段階へ。昼休み、教室の後ろの席で凜華が雄也に近づいてきた。周囲に人が少ないのを確認してから、小聲で囁く。「雄也くん……あの儀式のこと、聞いた？」「……ああ。先輩から」凜華の指が制服の裾をぎゅっと握っていた。頬が少し赤い。「私も……本当にやるのって信じられなかった。でも、拒否したら総交代になって、みんなに迷惑がかかるって……。申し訳ないけど、やらなきゃいけないみたい」雄也は拳を握りしめた。声が震えそうになる。「凜華は

.....嫌じゃないのか？ 俺、なんか
.....すごく抵抗あるんだけど」「私もす
ごく恥ずかしいよ。でも、伝統だって言
うし.....。雄也くんが総代として頑張っ
てる姿、みんな見てたから。なんとか
乗り越えたい」凜華の瞳は真剣だっ
た。彼女なりに義務感と申し訳なさで
葛藤しているのが伝わってきた。雄也
は彼女を悲しませたくなくて、なんとか
笑顔を作った。「わかった。俺も.....
ちゃんとやるよ。ただ、凜華に嫌われ
たくないだけなんだ」「雄也くん.....あ
りがとう。無理させちゃってごめんね」
その日から、2人の会話に微妙な緊張
が混じるようになった。準備の打ち合
わせはいつも通りだったが、時折目が
合った時にどちらも視線を逸らす。雄
也は夜になると不安で眠れなくなり、

凜華もバレーボール部の練習後にため息をつくことが増えたという。

体育祭の前々日の木曜日、放課後。2人だけで校庭のベンチに座っていた。「明後日が体育祭本番だね。そして明日……儀式がある」凜華が静かに言った。雄也は頷き、鼓動が速まるのを感じた。「部室棟の裏、明日、18時半に来れる？」「……うん。凜華、本当にごめん。こんな変な伝統に巻き込んで」「雄也くんのせいじゃないよ。私も副総代に選ばれたから……。見るだけだから、すぐに終わるよね」凜華はそう言って微笑もうとしたが、笑顔はぎこちなかった。

雄也の胸は痛んだ。好きな子に、こんな屈辱的なことをしないといけないなんて。でも、もう逃げられない。ベンチ

で並んで座る時間、2人はほとんど言葉を交わさず、ただ秋風を感じながらそれぞれの思いを巡らせていた。

そして次の日、体育祭前日の夜18時20分。雄也は古い部室棟の裏に立っていた。心臓が激しく鳴り、掌に汗がにじむ。10分後、18時半ちょうど。「雄也くん……ちゃんと来てくれたのね」凜華だった。顔はすでに耳まで赤く、目は少し潤んでいる。「凜華……」2人は数秒、無言で向き合った。空気が重い。遠くから、夜の校舎の物音だけが微かに聞こえる。凜華が先に口を開いた。「ごめんね、雄也くん。私も……本当に申し訳ないと思ってる。でも、やらなきゃいけないの。1組チームのみんなのためにも……。見るだけだから、すぐに終わるから」彼女の声は震えてい

た。雄也は唇を噛み、ゆっくりと頷いた。「わかった……。俺も、覚悟はできてるつもりだ」実際は、全然できていなかった。凜華の視線が、自分の股間に注がれることを想像するだけで、足がすくむ。雄也はベルトに手をかけたが、指が震えてなかなか外れない。「雄也くん……無理しなくていいよ。ゆっくりで」凜華が優しく声をかける。それがかえって雄也を追い詰めた。彼は目を閉じ、覚悟を決めてベルトを外し、ズボンとトランクスを一気に膝まで下ろした。